

栄養状態に着目した在宅療養者の入院リスクに関する検討

宮本 勝行 廣畑 淑郎

株式会社アール・ケア 訪問看護事業部

【背景・目的】栄養状態の評価とその支援体制は、病院に比べ在宅分野においてより不足していることが知られており、サポート体制の構築が緊要である。今回、在宅療養者の栄養状態と入院との関連性について調査を行ったので報告する。

【方法】訪問看護・リハビリテーションの利用者 187 名（平均年齢 76.2±11.5 歳）を対象とし、基本情報（性別、年齢、要介護度、主傷病数）、栄養状態（BMI、簡易栄養状態評価法（以下、MNA-SF））、栄養状態の評価実施から 6 か月以内の入院の有無を調査した。対象を入院群と非入院群に分け、性別、年齢、要介護度、主傷病数、BMI、MNA-SF について各々群間比較を行った。次いで、群間比較にて有意差がみられた項目を独立変数、6 か月以内の入院の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を実施した。

【結果】群間比較においては、年齢を除いた各項目で有意差が認められた。また、ロジスティック回帰分析では入院に独立して影響を与える変数として、要介護度、主傷病数、栄養状態（MNA-SF）が抽出された。MNA-SF における低栄養群のオッズ比は 6.21（95%信頼区間；2.06～18.8）であった。

【結論】MNA-SF の評価は、在宅療養者の入院予測に繋がる因子のひとつであると考えられた。入院予測には、栄養状態を含めた、より多角的で総合的な評価が必要であることが示唆された。